

「菌」

和食



寝苦しい夜だった。

— シャワーでも浴びないと体中がムズムズして気持ちが悪い。

パジャマは、ネットリと湿っている。

— 寝汗をかいたのかな・・・・・・・・・・？

裸になって洗面台の鏡に背中を映す。

「ウアーッ！ 何だっ、コリャッ？ 背中じゅうに・・・・・・・・！」

慌てて掻き落とす。拾ってみるとナメコのような茸。手が届かないところは孫の手で。

「フーッ！ 茸が背中に生えるなんて・・・・・・・・」

この日は、一日中部屋の中で過ごす。夜、寝るのが怖い、さすがに午前四時頃眠ってしまう。

翌日は、昼過ぎに目が覚めた。

— まさか・・・・・・・・ パジャマは、ネバネバ・・・・・・・・ アーッ！ 同じだっ！ いや昨日より酷い。眠っていた時間が長かった分、茸が生えた面積が広がっている。医者に行くべきか・・・・・・・・ 行くとすれば皮膚科なんだろうか？ いや違う。茸が問題なんだ。

インターネットで調べる。

— ここだッ！ 『新種の茸、募集中！ 国立・菌類科学研究所』 明日、行ってみよう。

まんじりともせず朝を迎えた。居眠りした程度だからか、茸は脇腹に少しだけしか生えていない。

— この状態のままで訪問した方が良さだろう。しかし、眠いな。

— ここだ。古めかしい建物だな。いたるところ茸だらけだ。

ドアを叩く。

「開いてるよ・・・・・・・・」

中から声が聞こえた。重たいドアを開けるとモワッとした湿った空気が漂った。薄暗い部屋の中を見るとピーカー、試験管、螺旋状のガラス管などが散在している。部屋の奥を見ると白衣、いや以前は、白衣であったような上っ張りを着た老人の背中が見える。

一心不乱にデスクに向い何かを書いている。

「あの一、新種の茸だと思うのですが・・・・・・・・」

急にその老人が、体をこちらに向けた。禿げているが、まわりには渦を巻いた白髪が残り肩まで伸びている。顔は皺だらけ。

「新種の茸？ ま一、良いだろう、見てあげよう」

茸を手渡す。

「なんだ、ナメコじゃないか・・・・・・・・ いや、違うな・・・・・・・・ 新種の茸ッ！ 君っ！

これを何処で採取したのかね」

「実は・・・・・・・・ その前に新種の茸ですか？」

「詳しく調べなければ何とも言えんが、このような茸は初めてだ。ひょっとすると新種かも知

れん」

老人の体は小刻みに震えている。

「君、何処でこれを？」

「驚かないでくださいね」

上着、下着を脱ぎすて裸になる。

「君っ！ まさか、体に生えたなんて言うんじゃないだろうね」

「そのまさかなんです。気味が悪くて堪りません。駆除する方法を教えてください」

「判った。茸を調べる間、そのベッドで待っていてくれ」

ベッドに座った途端、睡魔が襲ってきた。深い眠りに落ちる。

どの位の時間が経っただろうか、起きようとするが体が動かない。よく見ると両手両足をベッドに縛り付けられている。

「ちょっと！ 何をしたんですかっ！ 縄を解いてください！」

「そう言いなさんな。これは確実に新種の茸だ。突然変異かも知れん。研究を始めて七十数年。初めて見る茸だ。やっと学会に発表できる。生育状態を観察したい。そのままで居てくれないか。たった一日か二日だ。観察が終われば自由にさせてあげる」

男がわめき散らし五月蠅くてかなわない。口をガムテープでふさいだ。

「うー、う、うーっ！」

声が出ない。老人は、鼻歌を歌いながら顕微鏡を覗いたり、メモを取ったりしている。

茸は、勢い良く生えていく。痛痒い感じである。急に鼻歌が聞こえなくなった。目を凝らすと老人は、デスクにうつ伏せになったままピクリともしない。

まさか死んじゃったんじゃないだろうな。不安が募る。

二日経った。茸は、既に全身を覆い尽くしている。

コンコン。

「教授、居ますか？ 教授っ！」

「教授は、きのうの打ち合わせ会にも顔を出さなかったんだらう。部屋に入ってみよう」

男が二人、部屋に入ってくるらしい。

— これで助かる。良かった。

「教授っ！ 変だぜ。あれっ、死んでる！」

「本当だっ！ 既に硬直している。もう九十歳を越えているからな。老衰による自然死だらう。警察を呼んだ方が良いけど、ここじゃ可哀想だ。綺麗な部屋に運ぼう」

男は必死に叫ぼうとするが声が出ない。体も動かない。

「おいっ！ あのベッドを見ろよ。変わった教授だったけど・・・・・・ あんな趣味があったなんて」

「本当だ。菊人形は有名だけど、茸人形なんて聞いたことがない。でも、見れば見るほど良く出来ているなー。さっ、教授を運ぼう」

「この部屋は、もう誰も使わないだらう。研究所も、もうすぐ改築のために取り壊される事

だし・・・・・・・・」

『助けてくれーッ！』

(了)